

小さな冒険

佐藤愛子



文藝春秋

愛子の小さな冒険

昭和四十六年四月五日 第一刷

定価 四八〇円

著者 佐藤 愛子

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Aiko Sato

Printed in Japan

0095-331650-7384

目次 愛子の小さな冒険

一日クレオパトラの記	5
恋愛ホテルの夜は更けて	25
パトカー同乗、深夜に行く	45
ピンク映画ただいま撮影中	65
誰のための万博か	85
馬はハンサム、馬券は単勝	109
こんばんは、ノゾキます	127
鼻高きが故に幸せならず	145
“おとなの玩具”で平和を！	163
お化けなんてこわくない	183
なにが進歩と調和だよウ	201
“一泊十万円也”の寝心地	219

装
幀
風
間
完

愛子の小さな冒険

文藝春秋昭和四十五年一月号より十二月号まで連載

一日クレオパトラの記

子供の頃私の母は、私をつれて表を歩いているとき、きまって一度や二度はこういった。

「向うから来るあの人とお母さんとどっちが肥^はってる？」

私の母はその頃、西畑（私たちが住んでいた土地の名）の三デブの一人といわれ、三デブの中の小野夫人という人と一位をせり合っていたのである。

子供心に私はその質問の返答に窮した。例えば七十キロと七十二キロの人と並べてどっちが肥^はっているかということは、どっちが禿^はげているかをいうこととくらべて遙かに難しいことなのである。

「あの人が肥ってる」

そういえば母は満足そうに、「ふん」というが、「お母さんの方が肥ってる」といおうものなら、「冗談でしょう、わたしはあんなに肥ってないよ」と怒り声が返ってくる。そう思っているのなら聞かなければいいのにと、ひそかに思ったが口に出してはいわなかった。これぞ子心というものであって、子供ながらに母親をいたわっていたのである。

その母が瘦せたのは戦争のおかげである。食糧の欠乏と非常事態の連続で、母ばかりでなく三デブもみごとに消失した。世の中にデブという存在はなくなり、従ってデブという言葉は懐古的な響きをもってよき時代のことをしのぶすがにされたのである。

「あの頃はよかったねえ、たんとデブがいてねえ……」

と、まるで昔なつかしいチョコレートやウイスキーの名を数えるようにデブの誰彼の名が挙げられた。おそらく私の母の名も、当時の西畑の人々によって数え上げられたであろう。やがて敗戦が来た。

「おや、少しお肥りになりましたね」といえば、

「いえ、栄養失調でむくんでるんです」

という答が返ってくるものすごい時代が来た。そうしてやがて少しずつ平和が回復して行くにつれて、再びデブが擡頭^{たいたう}しはじめたのである。かく申す私も四十歳を過ぎし頃より中年肥りに悩み出した。何しろかつて三デブの一人としてその名をほいままにしたおふくろの娘である。タイトのスカートをはいて颯爽^{さつそう}と外出、食事をしたのはいいが、そのあとトイレへ入ったところ、スカートが腹につかえて上へ上らぬ。仕方なくスカートを脱いでそれを肩に引っかけたいで用を足したという経験がある。

しかし私は元来、不精者の怠け者であるから、肥り行く我が身をどうしようという気は一向に起らぬ。

「ノラクラしてるから肥るのよ」

とまわりの者はいったが、そうこうしているうちに夫の会社は倒産した。債鬼門に迫り、明日の米代にもこと欠くさまとなったが、それによっていっそう肥ったのには驚いた。これでは債権者に同情されるわけがない。ついに莫大なる借金を背負わされ、月々それを返済するため、に東奔西走しているうちに、ふと気がついたら四キロ痩せていた。考えてみればずいぶん高い

痩せ賃だ。四キロ痩せるのに二千万円とは。しかしある肥満夫人はそんな私に向ってまじめにこういった。

「いいわねーえ。あたしの主人も倒産しないかしら……」

女にとってデブの悩みはかくのごとく倒産よりも深刻を極めているのである。

ところでここに、丸尾長頸という、日本広しといえども右にいづる者なしというフェミニストの先生がおられる。この先生は少年時代、マンガで読んだ裸メガネ（そのメガネをかけると衣服が透き通って中の身体がまる見えになるというメガネ）への夢を、当年として×十？歳に到るも抱きつづけておられるという方で、

「佐藤さん、私は女が一糸まとわずに平気で町を歩くような世の中になってほしいと思いますね」

といわれた。まあ丸尾長頸という人は何というグロ好みであろうか。日本に中年女、何人いるかは知らねども、ズン胴、タヌキ腹、シワシワ腹、ダンダン腹など、あたりかまわずウロウロされてはどうなるか（とつい我が身に即して考えて）、私は大声で反対した。

「そんな！ 先生！ それでは世の中、醜惡でメチャメチャです！」

「ですからそこですよ、そこ、そこ」

先生は俄然、情熱的になって、

「ですから私は一日も早く、日本女性が一人残らず美しい身体になってほしいと思っているんです——」

そのため先生は「コトブキ酵素温浴法」というものを考え出され、東宝ビューティセンターという温浴場に力コブを入れておられるという。酵素温浴法というのは俗称オガ屑プロといい、手っとり早く説明すれば、オガ屑に酵素を混入して六十五度から七十度くらいに醗酵させたものは人間の細胞の一つ一つに含まれているものだが、年をとるに従って減少して行く。それをこのオガ屑風呂で補うのだ。

酵素を補うとどうなるか。

第一に痩せるという。つまり無理に痩せさせるのではなく、体質改善によって健康に痩せさせるという。第二に肌が白くなりキメ細かに艶やかになる。酵素を細胞から吸収したことで老

化を防ぎ、若返るのである。その証拠に更年期が過ぎて生理のなくなった女性の中に再び生理が始まったという人が十一人いる？ これはコトブキ酵素がホルモン異常に効果があるということ物を物語っているもので、中年女が肥るのはたいいホルモン異常のためであるから、オガ屑風呂こそ中年デブには理想的な痩せる方法だということになるのだそうである。

「そんな、借金背負って痩せたのはあかん」

と長頭先生はいわれた。

「佐藤さんもそろそろ、お手入れが必要なお見受けしますが」

と、裸メガネをキラリと光らせる。

「ここは美人づくりの天国でして、ここへ来られた方は十五年は若返っていただきます」

どうも丸尾長頭という先生は、何十年も女を口説きつづけて来た方だけあって、そのハスキーボイスにはジワジワと妙な説得力がある。私はいつか十五年若返ってみたい気になって同行のT嬢と共にオガ屑風呂に入ることにしたのである。

酵素温浴場とはオガ屑の砂場のような所である。そこにシャベルを持った女性が二人いて、入って行った私たちを見て穴を二つ掘りはじめた。横たわるほどの大きさに掘れたところで、

「さあ、どうぞ」と促された。うち見たところ、T嬢の穴は私の穴の半分くらい幅しかないと思ったヒガ目か。ともあれいわれるままにそこに横たわる。その身体の上にシャベルでオガ屑がかけられ、首だけつき出して天井を睨むというスタイルとなる。オガ屑は熱すぎもせずぬるくもない。海岸の焼けた砂よりはしつとりと落ちついたぬくみで、なかなか結構な気分だ。

と、ドアが開いて五十五、六のオバチャンが現れた。衣服を着ていれば「ドアが開いて五十五、六の夫人が現れた」と書くことになるのかもしれない、あるいはまた「奥さんが」と書くかもしれない「初老の女性が」と表現するかもしれない。しかし縁にフリルのついたナイロンキャップ風のをかぶり（赤頭巾ちゃんのおばあさんがかぶっているアレ）、空色のパンティを身につけただけの姿では、どうしても「オバチャンが」と書いてしまう（あるいは「オバハンが」でもいい）。

ところでこのオバハン、どういうわけか、パンティを裏返しにはいている。タヌキ腹が少ししなびかけて垂れ下り気味。乳房は昔なつかしい氷嚢型で私の子供の頃は、カキ氷屋のオバハンとか、夕涼みのバアサンの紐をしめない麻のチャンチャンコの間から、こういう乳房が覗いていたものである。オバチャンの穴はいかなる大きさかと横目で見れば、私の穴とほぼ同じ深

さなのにはいささかガクゼンとする。

「退屈でねえ。だからまた来ましたよ」

オバチャンは顔馴染みらしく、穴掘りの女性に話しかけた。

「おかげで十キロ減ったわ。階段の上り下りがラクになったのよ」

もしかしたらタヌキ腹のしなびた分が減った十キロかもしれぬ。

約十五分でオガ屑から出てシャワーを浴び、風呂に入る。風呂場でひと抱えもあるかと思われる三十七、八の女性に会った。一週に一度五回来て二キロ痩せましたという。

「奥さんは肥ってないじゃないですか」

と私に向って何やら咎めるような調子。

「いえ、丁度、中年肥りにさしかかっていたんですけどね。苦勞が多くて痩せました」

「あたしだって苦勞してるんですよ。人にいえない苦勞がいろいろあってねえ……それなのにちっとも痩せない」

と最後はいささか憤然という。このオガ屑風呂の一回の料金は回数券を買うと一回七百元だそうだ。三千五百円で二キロ減ったのだ。二千万円で四キロの私よりずっとワリがいいで

すよ、といたかったがやめた。

服を着てロビーへ上って行くと、待ち構えていた長頸先生に体操室へ連れて行かれた。そこにはあらゆるヤセル機械が設備されている。どうも私はこういうのはニガテだ。運動がニガテの上に機械というものがニガテだ。しかし長頸先生はしり込みをする私の腰のへんにベルトをひっかけスイッチを入れる。俄かにベルトはうちふるえそのバイブレーションによって刺激を受けた腰のまわりは、痒いかゆの痒くないのって、あたかも幾万の蚤のふに襲われたよう。

「それを五分やりなさい」

と長頸先生涼しい顔でどっかへ行ってしまった。一口に五分というけれど、五分間、蚤の大軍に襲撃されてごらん。痒いを通りこして腹が立ってくる。やおら現れた長頸先生、「痒い？ よろしい。そんなに痒くなるなら、まだこれから恋愛する資格はあるネ」

勝手にきめてもらっちゃ困る。誰も資格がなくなったなどとは思ってないヨ。

次なる機械はエクササイクルという自転車様のもの。それにうち跨またがり、両のペダルに足を乗せるや、スイッチが入れられていきなり断りもなしにペダルが上り下りしはじめたのには、あっと驚くためごろオなどと叫んでいる暇すらない。元来、私は自由を愛する人間である。手足